

河海新 第八

夕音 卷廿二

淨法 卷廿四

幻 卷廿五

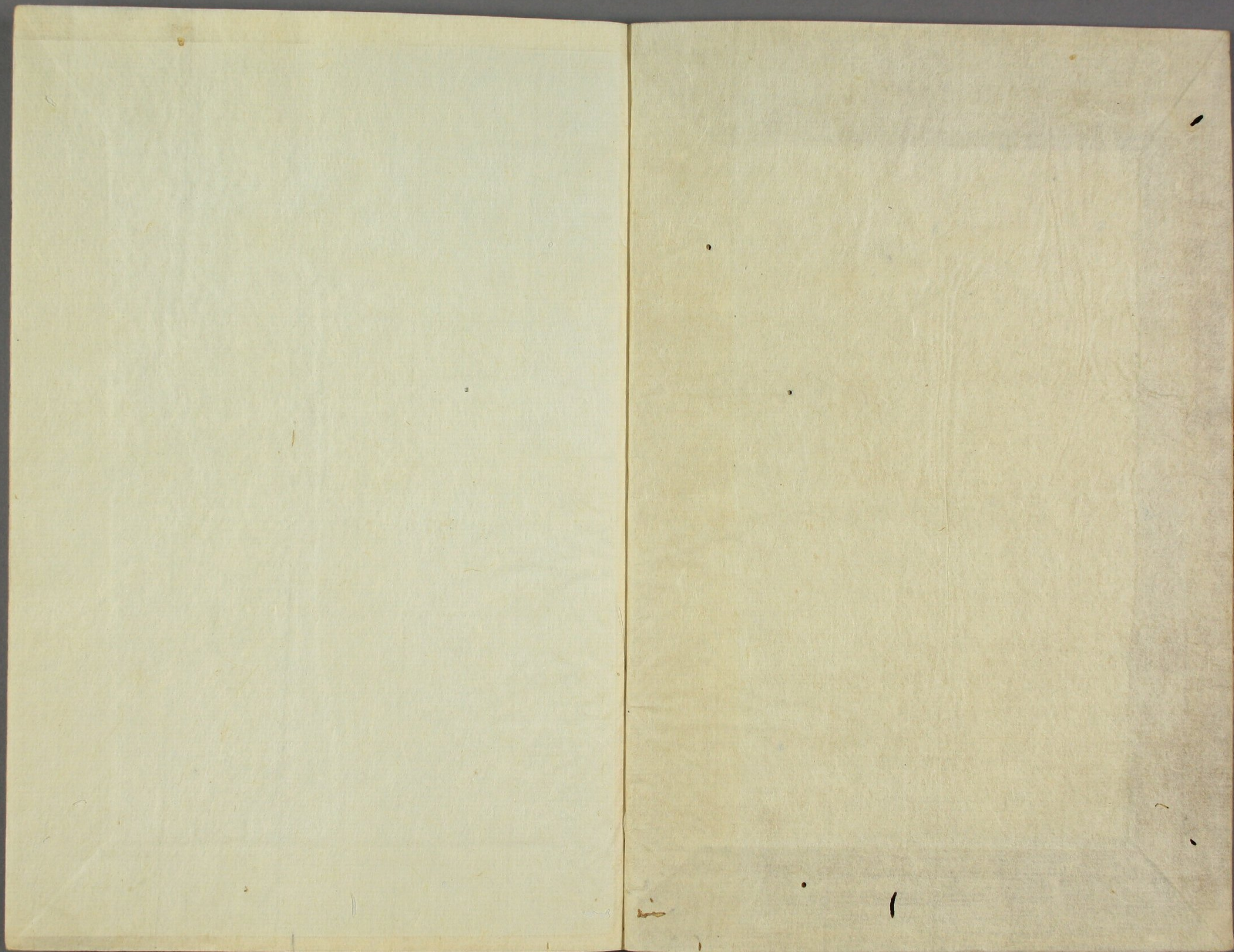
雲隱 卷廿六

白岩 卷廿七

竹川 卷廿八









河海抄卷第十五

第廿三 夕霧 卷名

正六位上物語博士源惟良撰

山里ノ哀ヲソフルタキリニ  
立イテソラモナキコナレテ

まめべの名賦よりてはさうがうはるだぬ 展季 文撰 又真人

用意

をのこまよふ山里りしやうらに 伊勢物語惟喬御子

頭ヲロシテ小野ニ住給ウツホ物語千景大臣只コウヲウシナヒテ後

山里心ホツケ成リノ設テソノワタリハヒへ哀ニキコユル也

アノ山ごきりしとて里に出でこちういひつるやふいとちうて

さうじちあしはるゆへありけり 惠心僧都千日山籠ノ間ニ

安養尼<sup>僧都姉</sup>所<sup>注</sup>勞アリケルニ下松ニテアリアヒテ對面<sup>模</sup>有様此<sup>模</sup>又<sup>模</sup>欵

小野ハ比叡坂本也今ノ大原也

こころいづいげまをのがまのの 世中ニアルヒトコトワサレキモノチレ古序

辨のまきこころ 柏木権大納言全才 紅梅右大臣也 清慎公

敦敏少将<sup>早世</sup> 天曆元年十一月十七日<sup>卒</sup> 藏人母時平大臣女<sup>シラヌ</sup>

人モアリケリ<sup>アツニチニハ</sup> 准<sup>丈公悲歎<sup>後撰</sup>見後撰</sup> 紅梅右大臣 頼忠右大臣 廣義公母同













物をもちてふらどりのせうやうのものやうあるは 鷹ノコトニ小ハ雄大

雌ニ雌鳥奢雄鳥病ト云ヘリ女ハヲゴリ男ハニケタルホタトヘタルニ

かくおきかのがたにぐまぼくをくえやうに 行取ノ公筋カクヤ姫ヲニモリ

タル事欽一説韓詩外傳ニ守株而伺兔ト有夏死云々水原云赫姫

ノ空ニ登リシ時兼テ守シマト公初時ニノソミテハホレタリシコトナリト云

やこづりとりむのゆめて 誘ウコワリ 摠ウコツル

かぬてよりぞあつてけり 才子ヲヨリツラサフ人ニナクハサテニワカニ物ヲ思ハスルカナ

みどりの神のあざりあかほりきまに 大浦乳母六位宿世ト云シ

松ナラハヒク人モ今日ガアリナラシソテノミトリソサヒナカリケル

あさりこころで 求也 擷也 小町

ひひのうらとて 人ニアハシ月ノナキ思ヒヲキテム子ハシリカニ心マケケリ

かんぎあさあさあめあつと 無嫌疑 ウタカヒナキ

一取のこやまがせし 大物ナヤミシウテトアルヲ三條ノ上アサケ

けえをあげてえうていのでやあまうりぞうとほまづ

三

アタニトリカクシテノ心ニ

いうあつむかき目にもあつとけり 坎日ニ

みよりやにりともふ馬と梅をかせめて 駿足馬

只人ぞにすうとあつとあつと女のくうとらるためハ

忠臣不事二君 貞女不見二夫

あやまらあつぬに大かきねかこちて 身ノウキヲ世ノウサトノニ詠シハ

或云ヲホワウカ大惣也

のいささかやけりてまゐいたりもあは 國史云延暦八年十二月

皇太后宮崩天皇錫紵避正殿御西廂率皇太子及群臣奉哀

命タニ心ニ叶モノナラハシニウヤスクソアルヘカリケル

みよのくまをせしあはつとらう 凡ハヤキミ子ノクスハノトモスレハ

あだのひびにきおとらうとらう 阿ヤカリヤスキ君カ心カ

かここさいねごものるうに 穀穂黄 白氏文集

アムンぎうのくれ日ごりのこゆるがうとて 我宿ノ花フミシタクノ鳥ウタニ

はるむこのときぬ日こかき 椽 順和名 黒色是ニテ黒服ヲ洙ニ











者何忽回此于乃梅玉匣而感思神女於真子忘前日期忽用玉匣  
即未瞻之間芳蘭之體寧于風雲翩飛蒼蒼于斯拭淚哥曰  
等許余蔽尔久毋多智和多多苗美頭獻能宁良志麻能古賀許等  
毋知和多留

神女遙三芳音哥曰

夜麻等蔽尔如是布企何天久毋  
波奈礼躬企遠理等母与和遠和須良須奈

浦島子傳記曰浦島子者不知何許人蓋上古仙人也齡過三百歲形  
容如童子為入好仙學奧秘術也独乘釣魚舟常遊澄江浦釣魚之  
处曳得靈龜也變化忽作美女島子問曰神女有何因緣而變化来  
哉何知為居誰人為祖乎神女曰妾是蓬山之女也妾在居昔之世結  
夫婦之茂而我成天仙王蓬萊之宮中子作地仙遊澄江之波上今感  
宿昔之因而来随俗境之縁也宜向蓬萊之宮將遂曩時之志願  
今眼眠島子唯諾随神女語而須臾之間向於蓬山外雖成仙  
宮之遊宴而内生旧郷之戀慕宜還故郷以縑衣被島子而匿  
玉匣裹以五絛之錦縑絨以万端之金玉而試島子曰島子若  
欲見再逢之期莫開玉匣之絨島子乘舟眠目歸去

忽到故郷澄江之浦而廻見旧里桑田變改而家園為河濱  
也水陸遷移而山岳成江海也僅遇於浣衣之老嫗而問旧里故  
人嫗曰我年百有七歲未聞島子名唯從我祖父之世古老口傳而  
經數百歲傳來語曰昔有水江浦島子者而好釣魚舟久遊江浦  
遂不歸来盖入海中也於是嶋子悲歎旧郷之遷變想像仙遊之  
未央憶慕之情胸臆似春悲哀之志心府如割不堪悲戀而忽  
開玉匣于時紫雲出於玉匣指蓬山三去也島子玉匣開之後紫  
雲三之処々老太忽来遂不知所終後代号地仙也不堪至感代嶋子  
詠七言廿四韻以三百八字成篇名浦嶋子傳記于時延喜二十年  
庚辰八月朔日也 元長ノ御子ノスミ侍ニケル時テニサクリニテ入テ侍ケルハ  
ニカ在ケンシタラヒトモテ又三時ニアケトテ物ノカミニサシヲキテ出侍ニケルノ千常明  
ノ侍子ニ取カクサレテ月日久シク侍テ有ニ家ニ歸テ此ハコヲモトナカノ御子  
ニヲクルトテ 明テタニ何ニカハセシ水江ノ  
浦島ノ子ヲ思マリツ 夏ノ夜ハ浦島カ子ノハコナレヤ  
ハカナク明テクヤニカルラン  
山三の心ちがまげり 夏引ノ山鳥ノ尾ノシタリツノ人丸  
ナカクシヨクヒトリカモ子 ヒルハキテヨルハワカルノ山鳥  
カケミル時ソモノハカナシキ  
ひさびさ

面ツレナキマワナル心丸







沈二階蠻繪螺鈿ナラ子ハ繪様ニヘヌト云ニ

うすいゑのきゑ 裳

いこひきこふしよるあやぎあつる ヒキ、リトハ急心ニシカキヤラナル風情歎

ちぎりあまやあぢんよごめむてありれこさうあぢりこさう

余一取ニ我カ人ヲコトクシキシカハ  
アハレ氏キクアナウトモキク

おいひりてゆけわたが名うた行こさうて

コヒシハタカ名ハタニ世中ノ  
常ナキモノト云ハナストモ

あまごみづぐきよささきいづらちりてかきやうしあつる 獲麟一句涙

与筆俱白氏文集

あまもやうくこみたまへご 尤

第廿四 御法

卷名 夕へキ御法ナカラモタニル代ニトムスフナカキ契ニラ

後めつこ御ほごいづるこさうあぢり 紫上子ナキ由ノコトヲ云ニ

あがりしあづららんいのちあひま アリハテ今ニツニ程ハカリ  
ウキコトシケク思ハスモヤナ

後せよあぢりちりとのぶあぢりけんご契うり 二池中花尽ク

満花花惣 是往生人各留半坐乘華葉待我閻浮同行

法照禪師  
人五會贊

山あのみすこかよごらあぢりくたげいごこほる 祇ふあうくあさへ

なるおりのあまのきさうしむねこせ人よ アサヘタルハ古人云アサ

レタルニ云 今案ニアサキカハ例ノヤスメ詞ニ幻卷ニ六條院遁世

ノコトヲ明石上イサメ申サル、詞ニサヤウニアサヘタルコトハカヘリテカル

くシキモトカシサナトモ立出テト有返支ニ須癩ニテ思ノトメン心フカ

キコソアサキニラトリヌヘケレト云 同心ニ

七僧あやうしあつてほうぐくけさるあや 法服 袈裟  
ほうりちるあまのこさうしあ

捧物



けいしちアハカゲのよへてる御教にやこみくろ 或ハイツノカラト

書ル本モアリ周捨可随所好法華之本門五百塵点劫之心也

夜登ノ喜ニノ日カスニ有ヘテソ 思アツムルコトモヲホカル 引分

あん殿のいのめりごめ 塗籠

わうじむりばなごめ 障子

わうけのねんごめ 双観經阿弥陀佛去此

不遠極樂莊嚴思ヤラル也

そとごころさむだしのこゑぐ 採薪及菓蔬ワケニ隨時恭敬キマウヘモ与提婆

品 法華經ヲ我カエシコトハ薪コリナツク水クミツクテソエニ行基

拾遺ニ為雅朝臣普門寺ニテ經供養シ侍テ又ノ日モロトモニ飯リ

侍ケル次ニ小野ニカリテ侍ケルニ華ノ面白カリケレハ春宮ノ御所ヘ

道綱母 タキ、コルコトハ昨日ニツキニシラ、イサヲノ、エハコニクタサ

わいぬののろがしめがごとくそておつとあんここのうたうさ

入益餘涅槃ニ如薪尽火滅 方便品 佛化ノ縁尽而涅槃ニ入給ヲ

タトユルソヨリ人ノ茶毗ニモ云ツケタルナリ

たきごころのいけりやとてあめてこのかたにふぶけりけり

採菓汲水拾薪設食乃至千時奉事 スルコト 經於千歳 提婆品

此身ヲ木ノ実ニソヘタルニ 心ホソキスチハ後ノキコエモ心ヲクレニト 斟

酌シテ千歳給仕ノコトクニ此身ナカラ久敷願フヘシ今薪尽ニナシ

哥ヲ同經文ニテ祝心ニ取ナサレタル心詞をタクニナルカ

モ、チトリサハツル春ハモノコトニ アラタニシトモワレソフリユク

まうわうれおいゆとくまうにるの末つ

陵王 一名羅陵王古樂長曲荒序八拍子各一合拍子八破拍子十六 終帖加拍子舞入時吹案麻序二切破三切有舞之而破四切中古ヨリハ

通典云大面於北有蘭陵王長葦才武而貌美常着假面以對敵

掌擊周師全墉城下勇冠三軍有入壯之為此舞以効其拍麾

刺之容之謂蘭陵王入陣曲

尾張濱主云高野天皇例好此曲仍奏御前還入時亦吹沙陀

調入右勅以案麻為入音声此古老取傳之案之陵王急ナレ唯早

ヲ急ニ成ト云吹緩急之急心ニ或說新羅陵王急吹伴曲急上大鼓也



たすぬべきは法がうづらうとてさくふと流ぶ長勢也

願我生生見諸佛世々恒聞深妙典恒修不退菩薩行

ふざいめんかごびきて終にも 名對面 后宮行啓儀 北山抄

六府次將以下一負近衛等供奉 裝束同行 其外宮司兼中少將者

帶弓箭供奉入御之後王卿名對面宮司向之諸衛不脱弓箭

着饗坐矣

みごきやうなむにゆるそぞ 中宮季御讀經

むのかりくにもむこころめててあめうじほへさるぬべ

かゝんわりよいかたけにもなほあかき 若人散乱心乃至以一

華供養於盃像漸見無數佛 法華經 曾非種處思元亮

為是華時供世尊管家

さうふみいじりたばらるる風さ秋風あゝねい

秋風イカ成色ノアキナレハ 身ニシテ計人ノコヒシキ

屋もせびきえんばあらふつもの世にわかれささぐらねむら

赤ノ露モトノ粟マ世中ノ ヤモセキヘソニヌヘキトニカクニ

ヲクレサキタタミナルシ 思ニタル、カレカヤノ露 和泉式部

あきさせに志ぐとゆるぬつものらば泣くあはれのうへこのこえん

暁のつゆ枕ニラキケルヲ草葉ノ上ト何思ケン 高内侍

かくてあ年をどくせはしむがふこ 上ニニ半年ヲスコス心チニテ

あけぐれの後にもどひねやどけりありや 本ノ一

僧綱

一日一夜にともいひこころのうへこそ 一日一夜受持八戒齋

一日一夜持沙弥戒一日一夜持具足戒以此功德廻向願求生極

示國 歡經

いみじくもにきさぬゆゑのあはれ 声ヲタニキテ別ル、玉ヨリモ

かゝるつともえさすぐしほちりかうけらぐりもせ中あけり ナキ床ニ子ニ君ヲ悲シキ

ウツセニハカラフミツ、モナクサメツ

うををあめいし心ちして人々からまはりけりや 栄花物語

シラニキ 云院ノ女御ノ御葬送ノ夜御車ノ後ニ院アユミ續カセ給ヘリ

十宵にうせめてこれいすわのあつさきあり 十四日ニ終焉十五日

曉葬送也或抄十四日ハ昔ノ葵上十五日ハ紫上トアル僻ユトナリ



をくらりてしゆくせうのぬきき 本ノ一

どぞれこまよまもどぞりりしてが涙の玉をばせてけちりける

念珠ニ泪ノ珠ヲヒキヨセタル有真

かくるせんぼうあざ 法華懺法

まいのさばり 作法 南岳大師依普賢行法經

作六根懺悔奉請法華經中一切三宝為懺悔證明誦安樂

行品初親近段為滅罪之方軌日本慈覚大師渡唐之時將

来之於叡山杉洞始行之云

弟とんともぬきげきをうらむぼと イナセ氏云ヒハナタレスウキモノハ伊勢身ヲ心氏セヌ世ナリケリ

うとむこのぬき いほやくに

令才九云 主君父母夫服一年 葵卷葵失後六條院我先立

ニシカハフカクツメ給ハニシトアリニ此事ノ哥ニカキリアレハウス、ニ衣ア

サケレト、アリ

かまこいり みまをさきうーこやあき人の秋ゆんをこめさるまひ

霜枯ノノヘヲハウニト思エハヤカキホノ草ト人ノアルテニ

いまはそちすの家をこころにまぎるゆぐ 蓮葉ノ濁ニシニヌコノロモテナニカハツユヲ玉トアサケラ  
涙のこがれぬ神のいもまのいひやまのこぬき ゆかき

ワヒツモ昨日ハカリハスコシテキ今日ヤワカ世ノカキリ成ラニ

第廿五 幻

卷名 ヲホ空ヲ通フ幻夢ニタニニエヌ玉ノ行旅タツ子

雲の光をりんぬき いけりし

イツク氏春ノヒカリハワカナクニニタミヨシノ山ハ雪フル

こころ やいむりてこころやと人もぬいひらぬのちむら

何ニ葉色ソメカヘシ白ラシ花モテハヤス君モコナクニ

こころ いのにあのみむら 蜻蛉日記云八日ニ未時許大臣

ヲハシニストノ、シレハ紅梅ノ唯今盛成シタヨリサシアユミタルニニケナクモ

有ヨシキ見アケテアナ面白ト云ツ、アユミノホリヌ



かろしきのあつてやうづくもあつて

百千鳥サハツル春ハ物コトニ  
アラタニレトモ我ソフリ行

これよりかういふをやくばくもきき

山タカミ人モスサメヌサクラハナ  
イタクナワヒソワレミマサシ

よもやうめりもこころまやふく  
濃也字

たものあつていざげつ、遠放振放離天放  
女三宮ノヲリノ一ニ

あけやのいしとざうしにわら女房あつてし曹司シモハツリシモ

うき世よいゆきいささえんころいほこのめはれがはら

ウキ世ニハユキカクレンナキクモリ  
フルハコノホカニモ有カナ

いひをけまいつ、火桶

ふらふらいひもんことよてごよ、是モヨロシハ中品ノ炭ニヨキホト

ラカニモ思ハニコトニテタニト云ニ相壺ノ巻ニモアリ

神のいひこせきあつていひ  
アスカ川心ノ内ニナカルレハ  
袖ノシカラミイワカヨトニシ

仏ものをもそはつていひ  
掟ヲキテノ字ニ

ごぢめ 関目九

うらひまらふはがしたるけいひ 文選曰馬驪松青族礼記曰檀弓

孔子之喪有自燕来觀者舍於子夏氏子夏曰聖人之葬人與人

之葬聖人也子何觀焉昔者夫子言之曰吾見封之若堂者矣

封築土為壟見若覆夏屋者矣覆謂次瓦也夏屋今之

形四方而高形四方而高見若覆夏屋者矣覆謂次瓦也夏屋今之

又形而長又形而長從若斧者焉孔子以為刃上難馬驪封之謂也俗同

白氏六帖曰馬驪形大堂前有立驪松 本朝文粹亦云管贈

大相國詔各巨勢馬驪年深蒼烟之松雖老龍光露暖紫

沉之草再新 太平御覽云 周景式廬山記曰石門巖即松村

也南臨右門洞中仰視之離々駢麈尾兮為塵尾松面嶺累然

如馬鬣亦葉五粒者名五粒松 豫章記曰徐孺子墓在郡南時

杜牧守徐與於墓邊種松童賢廣列先賢傳曰頓琦至孝母喪

琦獨立墳歷年乃就居喪踰制種松柏成行 鬣廣韻毛鬣

鬣良涉切 又常陸國風土記香嶋郡内童子松原ト云事有

赴縁ト物語ノ心ニ相叶ハス仍畧之 水原抄云大國ニハ人ノ墓ノニルニ

ニ小松ヲナラヘウフルト有ト云 若又峯續ナニ木ナトニモヒトシクヲナシカ



タナル松ヲ馬鬣松ト号スルを此松ヲ馬ノタチカニミタトヘタリタトヘハ  
タケヒトシカルヘキ心ニシカレハ紫上ノタケスカタニ中將ノ君思ヨソヘラレ  
テ唯ナラニシヨリハラウクシトアルを如何此事俊成卿難義也  
云云

案之紫上中將君長姿同程ニ思ヨソヘラレ、故ニウナヒ松ト号スルト  
云ヘルハ不然者ニ詞心バセカタチナ氏メマスケテウナヒニツニホヘタルケ  
ハヒトアリステニ心ハセヌケハヒトイヘリタケタチニアラス文選ノウナ  
ヒ松ノ訓分明也不審不可有礼記ニ馬鬣ハ墓ノカタチトニヘタ  
リ是ハ若異朝ニ墳ニ必松ヲウヘタルコトナレハ其形馬ノタチカニ  
似タレハ云レ或又童男女又髻髻或ハ垂髻ナトカキテウナヒト  
ヨメハ末小松ノ心ニ所詮彼墓上ノ松ヲ每人ノカタミト見ルコトニ  
此中將君紫上ノカタミニヲホヘタルニ此外毎別ニ云レ

かこふささい 頑  
海の面のこぼれまゝに  
かのわがこゝろのこころざし

スミツメノ君カ袂ハ雲ナレヤ  
タヘス泪ノ雨トニ降  
ワキモコカウヘシ梅木ニルコトニ  
心タヘツ、涙ナカレ

見ルカラニ袖ソヒチヌルナキ人ノカタミニ見ヨト極シ花カハ

栴てん 花のありてしるべきは  
コチフカハ白ヲユセヨ梅花  
アルニチシトテ春ナロスレソ

名のももさこころざし  
やまのきかこの心ちよげふ  
あさくれぬ かな  
かむ桜 朱桜 和名ニ 樺桜

本のおぐりに丁を立てが  
共愁日照芳難駐仍張帷幕乘陰涼  
文集牡丹芳

おほふ汁の神もとめけむ人  
枉日本記 禍也

こづりのいさげも  
或人云妻服ハ一期中ニ二度着之云  
六條院葵上ノ時己ニ着服

主君ノ服ヲ一生着人在之異朝ノ趙武ハ程嬰カ服ヲ三年ニテ着







俊成卿云ヨルヘノ水ト云コトハ源氏物語ニ賀茂ノ祭ノ日哥ニサモコソハヨルヘノ水  
ニミクサイメトヨメルトミ侍ニサテハルキ哥ニモ見及待ラス此水ヲロク  
承ニタトハ何レノ社ニモ侍ラメト当社律前ノ月ニ海ノ面凍ヲミカキ濱  
ノ砂玉ヲシケラシテキテヨルヘノ水ハカリニ向ヒテ月ヲサエニケリト思ハシ  
コトイカト云 清輔朝臣陳云ヨルヘノ水ナトハ何ノ社ニモ侍ニコソ又  
哥ニヨメルト源氏ノミニアラス和泉式部カ集ナトハ御ラニセサリケル  
ニヤ云 和泉式部集云稻荷祭ニシニカタハラナル車ノ子イサキナト取入  
テミクルシキヲ車ニ取イレトキムノフノ少將藏人ノ少將云ケルトキニシテ  
一日祭ミルトテ車ノ前ジスホルトイフカケテトリ入サセシ イナリニモイツ  
ルトキニシナキ一ツ今日ハタノスノ神ニニカスル  
返シ 何事ヲシラヌカニニハユフタスキ ト云タレハミテクヲノマウニカミヲシテカキ  
テマル 神カケテ君ハアヲカフ誰カサハ 此哥ヲ袖中抄ニ顯昭源氏哥ト云  
ヘリ俊成卿申サレタル源氏見サラシ哥讀ニヤ  
袖中抄ニヨルヘノ水トイヘリ顯輔卿說云  
顯昭云ヨルヘノ水トハ神社ニカメヲラキタルニタミレル水ニソノカメヲヨルヘト

云カ神ニヨルト云コトヲホカリ託宣ニハ神人ノ口ニヨリテツキ給コトニヨリキ  
トニコヲ申スモ神ノツキテ物ヲ仰セラレモノニサレハヨルヘノ水ト云モ此瓶  
ノ水ニ神ノタヨリ給テ神水トテノモツレハナキ一ノ慥ニアラハル、又物  
ツキヲヨリニシト云モ同心ニ又寄占ト唇テヨクヲトヨメリ神ノヨリ給占  
ニコソ万葉ニ神依板スルスキト云哥有  
古哥云 神サヒノフルエニタニル天水ノ 雨ナトノ降入テタニル水ノユトニ天水ノ心  
を 奥義抄云神社ニ瓶ヲ置テツレナル水ヲナキ一ヲラヒタル物ハ神水ト  
テ是ヲ飲ニタスノ社ナトニ今テモ有ト云  
ふかふかづまの月くげよいこきもやうにいづもろくわりし かりこ、  
ふ代やあゝせらるゝ急もせあんこすゝるゝ程に 色カヘヌ花タチモ三時鳥  
まどぬういあゝかこ 耿々残燈背壁影 蕭々暗雨打窓声 文集  
いもがききよにやとあゝせまほけきいこ急あり ヒトリシテ廟ハ悲ニキ時鳥  
かのおづをわきこゝろくらくれまんごうあやせ 極示曼陀羅事 イモカキキ子ニラトナハセハヤ

白氏文集云繡西方幘讚序 有女弟子弘農郡君姓楊号蓮  
性癸弘願捨淨財繡西方阿弥陀佛像及本國土眷属一部奉為敬



氏長姉揚夫人滅宿殃追冥祐也乃至讚曰金方剎金色身資聖力  
福幽魂造者誰弘農君受者誰揚夫人

當麻寺極樂曼陀羅緣起云右大臣藤原豐成女厭離穢土之志不  
淺欣求淨土之望是深昼夜戀慕極樂之依正二報戀慕渴仰之  
余乎自書寫稱讚淨土經一千卷不願禁中之交遊遂背人間之榮  
耀為比丘尼受如來戒天平寶字七年六月十五日發一誓願一食長  
翁泰龍當麻寺我不見生身阿彌陀如來者永不出寺懇念無二稱  
名不退也信々切々故感成是不空絕經五今日同月九日化尼來曰  
欲見生身彌陀者可調設蓮莖百駄許言畢去是故申下 宣旨  
於近國募年貢設蓮莖同九日化尼亦來伴端嚴女人其齡三十許也  
化尼与化女取蓮莖絲系去寺乾六町許乃至化人令掘彼清淨之地  
靈水忽涌出浸蓮系於其水凍為色化女即以五色蓮系九日夜亥刻  
至寅刻織極示曼陀羅織之間寺乾角有織稅之音聞化尼与發心禪  
尼相對爰化女織出曼陀羅昼兩人前懸之奉禮極樂變相也其分  
量高一丈三尺廣一丈三尺三寸也化女放光明入雲西去化尼暫留效變

相之功能於禪尼權化之開導聞法銘肝 文畧抄 極樂曼陀羅女

人ノタマニ故和漢ノ先蹤有ん仍紫上モ心サシラケルナリ

ろこいにこそこの門はひろげぬめりぬのゆゑ 于公高門心カタ雲大  
臣子息多トナリ

いふふしてかこゆ人たぢぢぢ 古ノカカタラハハ霍公  
イカニシテカハ古声ニ鳴

池のちちすのゆくりちちぢぢぢ 時移事去樂尽悲来每春之

日冬之夜池蓮其開宮槐秋落 長恨哥傳

いふふはけりるるぢぢぢ カナシサソニサリニサリ人ノタマニ  
イカニシテホカル涙ナルラン

日くくのおゆるるるやうるふふあのおるる この夕ぐべ

つもぐくこころあきくくく なみのりわがこころきりりのゆゑ

日クラシク只虫ノ声トイヘリ後撰ニハ蟬ヲ夏虫氏ヨム

夕殿に螢をてこれいのゆ ゆ

夕殿 螢もて思 悄然 秋燈挑尽 未能眠 長恨

ほのいゝ人 金谷園記云七月七日夜洒掃於庭露設机

庭 其菓酒 酹 兼散香粉於庭上以請阿鼓 織女言此二星



歡會夜也俗人懼之コロコシテ或見天漢中見奕々白氣奕々石反 美客  
光耀五色以為徵應見者便拜而願乞富乞壽乞子美客

せんさいのあはれいとぞく  
ヲク露ヲワカレシ君トミルカラニ  
アサナクカ意ヒシカリケル

九月に於て九日わたおほいたふまを法説して  
秋ハナヲタニクレコソタナナラ子  
ヲキノ上凡萩ノシタツユ  
人ノ身モナラハシ物ヲ今ニテニ  
カクテモヘスルモノニソ有ケル

是ハ周忌也イツレモ佛事ノ日ヲ云也 齋 沙會也  
君こゝろ泪ハさうとそを物を今日をば何乃とてと云らむ  
我身ニハ悲事ノツキセ子ハ  
キノフヲハテト思ハサリケリ

九月に於て九日わたおほいたふまを法説して  
徳とそにたきかしの葉の影を福袂小く秋枯るか  
アタルニテヲキイルキクノ白露ハ  
カリノ世思フ涙ナルヘシ  
諸氏ニヲキイルノ露ハカリ  
カラン物ト思カケキヤ  
神を月イツモ時雨ハ降シカト  
カク袖ヒツルヲリハナカリキ

まばら志 一ホロシハ幻術事也仍術者ヲ一ホロシト云也此奇ノ心ハ蜀  
方士カ楊貴妃ニ尋逢タリシ一也方士ハ術士ノ惣名也  
十七

カリノツハサモウラヤニシクトイヘルモ彼方士カ碧落ヲキハメテ奔コト  
電ノコトシト云ル心也

いふ志へらなを志しおげのわらうとがふにば志いでらうべし  
也 小忌 青摺 山藍摺也  
し女卷ニ昔法目トナリシヲトメノスカタト有シト云筑紫五節支ナト

今こそをさうりまふべきほごちうにばうまうらふよ  
聖人避世夏和漢之先蹤不可勝計

やれはたしとにばうらふらふを  
ヤレハヲシマテ子ハ人ニミエヌヘシ  
ナクくモ猶カヘスニキナリ

けふふ年のかたみに思ひべり多ふや  
カキツケル跡ハチトモ有ヌヘシ  
カヒナニト思ナワヒソ水クキノ  
跡ソチトセノカタミナリケル

黄壤誰知我白頭徒念君唯将老年泪一灑故人文  
未天元少  
尹文集序

志でり心こゝろをさうりまふべきほごちうにばうまうらふよ



シテノ山フモトヲミテソカヘリニシ  
ツラキ人ヨリ先コヘシトテ

シテノ山越テマキツル時鳥  
志シキ人ノウヘカタラナシ

或説

云シテノ山ハ四天ノ閣也

音通也云々

十王經死天山門集鬼神云

ウツホ物語菊宴

今行スエヲイカニセヨトツ

淨心ゆきこころいしめ

目タ、シクも或ハ云女々シキ

淨佛じゆつの名なこことといいははししるる

宝龜五年始之云見官

東事類とうじりゆ或ある天長七年十二月始有佛名

或説義和五年十二月十九日始之云貞觀格云太政官符應

行佛名懺悔之支

こぢやのこゑ

錫杖經曰錫杖亦名智杖彰顯聖智也

亦名徳行功德本故也佛名夜初日後夜御道寺師著礼盤唱佛

名畢錫杖亦第三夜錫杖後藏人受取内侍所出綿被於御導

師弟子僧等

だうしどうしののままづづふふととわわららへへふふめめししててささらら月つきああどど常とこののささららよよ

禁中御佛名第二夜被著栢梨第三夜内藏寮酒肴著蕚等也

まもでの命まもでののみことををああららむむ雪ゆき乃の中ちゆうにに色いろつつくく梅うめややららふふかかががししてて心こころ

三條右大臣集延喜十九年十二月十九日内ノ佛名御導師ニ

雲晴法師カ参テ侍ケルソノ夜御遊有ケルニメシ出サレテ侍ケルヲ

賀シテ御カサシタテニツラレケルツイテニ奏シケル

雪ノ中ニ山ノフモトノ雲晴テ

咲タル花ハ子ルヨモナシ

貫之集屏風哥佛名ノアシタニ導師ノ

道アミトハ山ノシラユキ

カヘルニ人々アツマリテ雪様ヲモテ遊法師男共ニツリタチテアル

程ニ雪降カル梅ヲ折

爆竹驚鄰鬼驅儼聚少見東坡追儼伎禁中

亥一刻左右近立陳即閑義明門不用長示永安門儼人等参陸

陽師奠祭讀咒文畢方相先作儼聲以戈擊手楯如此三反群臣

相兼和呼追之待臣相分殿内并四方驅逐を感方相八目

仙華門經御殿前出自北廊畢羽林風内匠寮儼木振鼓シタ

テニツル刻限殿上男女房ニワカチ給聊動揺アリ委見紅葉賀











一にせしむる

様物同様物ト云心也夕霧大臣兵部口宮ノ外舅ソノウヘ大姫君  
参入東宮又此宮ヲ聲ニトリタテニツラニコトアリニ同様成ト  
斟酌セラル也サリナガフサル御ケシキアレンヲハモテハナレト也

六乃弟るん

夕霧右大臣女 母典侍惟光女

御踏 日本記

大略 万葉

雲平馬ノ

うま〜此所ふびの〜系乃ま〜とわ〜たてま〜を〜ん〜系乃〜  
取〜ふ〜む〜げ〜う〜ふ〜く〜く〜い〜と〜み〜け〜ふ

月十五日分別支 謂黑白兩月也俱舍論有二師一云云  
自一日至十五日月輪次第增光故名白月自十六日至卅日  
輪次第減光故名黑月是正義 一云自一日至十五日白衣  
天子十五人一夜別一人参入月宮故名白月自十六日至卅日  
黑衣天子十五人一夜別一人参入月宮故名黑月是傍義  
こよわ〜せ〜た〜火〜と〜き〜ら〜た〜る〜や〜う〜あ〜て 九右史記  
佛此夜滅度如薪盡火滅 法華經

春の陽いせな〜らぬ〜し〜に〜げ〜は〜ま〜る〜る〜ゆ〜と〜あ〜ん

残ナクチルソメテタキ桜花  
有テ世中ハテノウケレハ

十日して二月に侍従は成秋右近中将ふめて御たぐりのかおをい

こまあ〜う〜く〜う〜い〜で〜あ〜を〜わ〜せ〜て〜ま〜が〜あ〜ど 冷泉院山鈴也

無暇也

表氏ウシトモ物ヲ思時  
ナトカ泪ノイトナカルヲ

思ハ氏身ヲシロケ子ハメニニヘヌ  
心ヲキニニタクヘテソマル

イツカタモヨカルコトノワリナキニ  
フタツニワクル我身トモカナ

お〜ら〜ま〜き〜心〜ら〜は〜の〜ゆ〜め〜あ〜こと〜の〜に〜ら〜る〜く 薫中將為柏木権

大納言子事聞及款側聞ホノキクトハ髪方髻ニ聞タルナリ

く〜いた〜い〜の〜あ〜ら〜い〜し〜を〜あ〜さ〜ら〜り〜を〜も〜え〜て〜 かが〜と〜が〜揚〜ご〜ら〜る

金光明経曰余時虎者今瞿夷是 華嚴経曰 迦毘羅

城有釈迦名曰瞿夷 法華文句第二曰 天台尺 未曾有羅云

是瞿夷子文同疏記第二曰 妙樂記 昔時瞿夷是今日耶輸落字

今日瞿夷乃是天女ナリ記 耶輸多羅比五尼之子羅睺羅尊者佛

出家之後経於六年誕生大臣等疑之耶輸多羅抱兒放火投之

全不燒是則誓言也 悲華経 瞿夷太子ハラコラ也佛出家ノ



後六年ニ生給シ故ニ人ウタカヒテ云々太子ノ我ヲ問得ケニサトリモカナ  
佛ノ御子ヲコラノコトク云々

おほこき給つる女の心さとり乃程ふもちすの病もけさらかる。みごと給  
もむゆりさうた志 蓮ハノニコリニモ又心モテ  
十ニカハ露ヲ玉トアサムク

いほのあまがも程うたが志 女人身ニ程有五障 法華經  
一者不得作梵天王二者帝釈三者魔王四者轉輪聖王五者佛  
身也

かろしと給ふけむとやすかぬ思もほしてやあどし  
過者也 柏木モエシケフリノムスホレシヤ

たい雨すまるとに百歩乃ほつもかほりぬべき 百歩香  
たまふれ花乃まことばあく神うれ給梅のうはまゐの志づくにもぬれあふ  
志むる人たほく秋乃燈ふぬ志あきいぢらるほもものかほりうられて  
あうきおいせことばにけりあしあらんまきうらる

今日楼シツクニ我身イサヌレシ 又シシラス香コソ白ヘレ秋野ニ  
タカヌキカケシフチガニソモ  
カコメニ誘風ノコヌニ

いこめやあまきぞ人乃とむふふ志もあるる 梅花タチヨルハカリ有シヨリ  
人ノトカムルカニソシニスル  
春ハ梅乃花園と給給秋乃人たあぶふとみる志をうらつまにせあふ  
花の家もたさく心うらあぬりぞ老をわするも志とさうへけあふ  
うまこと乃げあさわれしつうさぞ

梅

女郎花 名ニメテ、ラレルハカリソヲミナシ我ヲチニキト人ニカタルナ

萩 有廉鳴号 秋萩ヲシカラミフセテ鳴廉ノ目ニハ見ヘステヲトイサマケサ

菊 有却老之術 皆人ノ老ヲワスルト云菊ハ百年ヲヤン花ニソアリケル

蘭

わうきごち 若共  
た人あていさむかりあく 凡俗 日本記  
まららひいしと 交泰 日本記  
あげのこころを ナラサリ也 ナイカレロナル心也  
いざあしれは、 引率  
はめりまじ 不離



うきろこれつりあるべしなまうけ六条院あていと心こころに給て

還饗 人ヲモテナスヲ云也

賭射

清和天皇貞觀三年正月十八日始之

北山抄曰賭射還饗大将先着座

垣下坐上儲蓄圓坐

次将著奥

坐賭弓不儲土敷圓坐依蒼卒也相撲時敷土圓坐或送上敷之

次垣下公郷着座

相對次立机

或次将机先立三献訖テ有絃哥之真給祿有

差或命東遊将監以下舞

天祿例也少将臨檻相撲之時三献之後亦次将令召相撲人等事少将用

北山抄

延喜三年正月十八日御記云賭弓記九大臣向其第而九大臣人以下以其賭弓

勝率至其身。賭弓ハ天子弓場殿幸シテ弓ヲ御覧スル也仲春ノ月弓ニ

ミルテ礼記ヨリ出タリ四府左右近衛左右兵衛舍人射之左右大将射手ノ奏ヲトル

事ハテ、後大将射手ニ饗ヲ賜也近衛管領成カ故也後撰相撲ノカヘリアルニ

女郎華ヲ折テアルシハ子ノカサニサストテ

三條右大臣

ヲミナヘシ花ノ名ナラヌ物ナラハナニカハ君カカサニモセム

私云カヘリアルニノリ弓ノ後大将方ノスケヲヒキテ我亭ニテ種々ノ

九三

饗座儀式アリアルシヲハ饗ト云字ヲヨメリ又亭ト云字遊仙窟ニ

アハヤト云ヨミアリ仍吉事ニハ此亭字ヲ遣ヘシ方ノスケトハ九大将ナ

ラハ九中将九少将右大将ナラハ右中少将是也

は祓のこと 如常也

むくへ小急が乃みこたちくじだちめれい所有

垣下 ヌニカラエカトヨメリ

もともこもいしてかよれは神

カヨレルハヒルカヘル心也ハシ女凡倍柏子各六合十二

合十二 二段 各六 マラトメハカマトメゾタツマコヲトメタツマヲトメ 二段

神ノニスコノニヤシロニ神ノニスコノニヤシロニ多好多方説始テ平野祭ニ男使夕子ニ時ウ

タフヘキ哥トテヨル 太中臣能宣朝臣

千ハヤアル平野ノ松ノ枝シケニ 千ヨモハ千世モ色ハカハラシ

やみいあやあし心もとらふらふはなれどくふこそいへるを乃るりせれとめであ

えり 春ノ夜ノヤミハアヤナシ梅花 降雪ニ色ハニカヒス梅卷

色コソミハ子アマハカクル、 香ニコソ似タル物ナカリケル

祓乃まことと 一方ノ大将カヘリアルシノ日凡倍ノ神ノニスト云哥ヲ

ウタフ定事也云

紅梅 白兵部ハ 并一

卷名 按察大納言折紅梅奉兵部以宮



乃の二條あせらの大納言の御事故致仕のかとら二らう也

此巻前

按察ノ大納言傳也仍竹河卷ト并の二ヲ定カタニ薰中將竹川ニ始  
四位侍從中央宰相終中納言也此卷ニ始ヨリ源中納言トアリ  
然ハ竹川ノ次カトニ元ニ亦竹川末ニ按察大納言右大臣成前詮此  
卷ハ竹川ノ中央先ヘニ此其比ノ詞人ニ不措心歟是ハ橋姫卷ノ始ニ  
其比世ニカスヘラレ給ハヌト云同時分シラセシタメナリ薰中將ヲ源中納言  
トイヘルヲ 竹川終推事  
秋中納言任 兵部卿宮宇治宮姫君ニ通給トイヘルヲ等  
也奥ニ三ヘタリ取詮此卷ノ宇治橋姫推事總角同時也

今とら給ハ後乃行はまかたの娘まき程とらんたたくとら一とら  
野道太政大臣鬚黒大臣一名也 素寧抄云野道ノ字人コトニ

ヲホツカナキトニ申サルト重代ノ本ニ昏墨テ侍ウヘ行成ハ自筆本  
ニ野道トカレタリシカハ仰テ信ヲ取侍キ双忍大臣夏野  
一名野道大臣ト号ト云ニ或説ニ後ノたほさおとくカ今上ノ御治  
世ノ比ヲヒ太政大臣二人也致仕太政大臣 及裏葉ニ任之  
若葉ニ致仕 鬚黒大  
臣 紅梅ニ太政  
大臣ニ任 是也仍後ト云カ惣ニテ此物語中ノ太政大臣五人也引入

九四

大臣二條太政大臣六条院致仕大臣鬚黒也其中ニモ後也古  
今集忠仁公ヲ先ノヲホキヲホイニウチキミトカケルハ前官ノ後ニハ  
アラス延喜ノ比太政大臣只二人也仍雖不辭官前後ノヨシニカク  
也若此等之歟歟

浄子うせ給ひて後、まびほ、う、い給うとど

本ノミ、

いげせんし 卑下  
かとかの神乃此ことりし、家よふやういしてきて故おとの院の女は  
乃清こをむひのいたくたげうてやみ

閑院尤太臣冬嗣以来代々藤氏執政臣帝之外祖タリ歟

こゝたを志のやうに 師 事  
たゑあそとこを

西の言ふ侍らんいむを心よ入てまぶるこまきひびうはくべく  
やたげへ侍らん コモトハワレモト云心し 吾字也

け比世よりう給へる源中納言兵部卿のま何よりあそ昔の人よたと  
あまのうら 本ノミ



むわいをくしてちづらうとよもいにしう物さうふちうとよとほじなる

この井いぶがためて 宿衣姿 押手 柱 撥音

つまびきよ 爪弾

かえりかゆつふふあれたるこゑして フツカハフトト云心欵

太 太笛 皮笛 哥笛 嘯也 文選嘯賦云動

層有曲發口成音注日善日郑玄毛詩箋日嘯蹙口而出聲

也 九條殿記日天慶五年正月七日壬戌雖甚雨依蓋止例尚引

青馬今日酒盃十一巡王御有酒氣吹被笛式ア口敦定親王云

年来更不有如此之時今日似古時甚感悦多云 原事簡要

云在李部王記為嘯也 早耽事之皮笛 示記 中古自異朝

笛ヲ渡セリ以皮裹上左近將監大神式賢成皮笛之疑 胡角一声霜後夢 胡角ハ則皮笛也 云

楸 蒼 白氏文集

ある人ぞいふとて 君ナラテ誰ニカミセニ梅花 色ヲモカラモシル人ヲシル

い志がりいあをむけえ給いぬハ 本ノ、 昔まひいしきつたみにハ此宮計こそハ佛のうくれ給けいけり

よハあまんがいくりえあちんと二たび出給へるしうたごふり

きいぢりしるむけりやみよまじしるむごころにきこえをさ

えんうしとて 大論云尺迦佛入涅槃之後阿難登高座

結集諸経之時其形如佛仍衆會疑佛再出給 阿難未證四果之人也

まううしむいしるむけりやみよまじしるむごころにきこえをさ 先也 又云待也 仍阿羅漢等不用之其時阿羅漢自然現瑞

案之西説共ニ證本ニ聲ヲサセリ面ヲ先心相叶欵 アラタニノ年行カハル春夕

くらしる升のふよこしてうあん白き梅よハとて 後 色ニトテ梅 花ノアルト云古哥欵可勘 ハ管家ノアルニナント

テ春ヲワスルナノ御哥 盤也 哀シレラシ人ニ見セハヤ

あゝ心あらん人よあどこをさ 伊行尺奥載此哥猶不相叶欵

あだ人ニせんよ 他人 日本記 越人孟子他心 日本記 異意



万二 接カリニサル卷ナキ春ナラハ  
アタシ草木ハモノナラナクニ

あつりうあごちて

後言

もとつうの白へるるが神うれは花もえあつるあをやりとん

本ノ香ナリ 万葉ニ本入トアリ

ふみしつうさいのかたよすはたへ給そ

フサイハワカ思スナ

ル耳ヨリナル心也縁アルマウナルコト云ナリ

ハのふの姫あそしんさーあさかすいでいとまげうもあてあ

きねふ

宇治八宮 桐壺帝 兵部御宮通宇治宮中宮之事總角卷也

但推本卷ヨリ宇治中宿アリ

母君がたまさくふけりらがりきこ給

サノミ宮ノ御返

ナカシモヒシナケレハ母君時御返ヲキコエ給トイヘルサカシラ也

竹川 并二

卷名

竹川贈答在兩所四位侍從送藤侍從哥并藏人

少將致冷泉院女房贈答哥也又正月廿余日四位侍從來會藤侍從同音歌此曲此并又横並也勾兵部御卷二月薰中將侍從同年秋右近中將加階于時十九歳云此卷始又始四位侍從終在中納言以是可思合

わつごたら

悪後達

此卷乃ゆくりみそにふあもこと

鬚黒大臣ヲ光源氏ノムコニモア

ラスト云也サレハカノ大殿ワタリノ後達ノ物語ヲモシヒカニマト云致

人のいしがたわえふやあごあわしかりけふつもころいまたこあらん

此卷ノ始ヨリ此詞ニイタルニテイタク何ノ故氏聞エサルニマサタテ意趣有致若物語時代ノ准據ナトソノ人トハミユレ氏一篇ニ其行跡ヲ守サルコトホキ故ニ其難ヲノカレントメニ如此書之致桐壺帝准延喜帝光源氏比西宮大臣支等也

年のくすはとらまはるる人め 卷



人乃らのこまにのこよふわざりくれば 人心好悪太不常白氏集  
らうど給こま 領給

己被揚妃遥側目 白氏文集 上陽人 在桐壺卷

己被揚妃遥側目 白氏文集 上陽人 在桐壺卷  
トリアス物ニモアチマ世中ヲ  
在ニナカラノ我身ト思ハシ

ゆふし給すはねとみもさうけづく 本ノニ

六条院乃御寸志ふまきかえり乃る玉の心後よ生たまへしきこみ  
冷泉院乃侍子乃やうのつづく位の侍候の侍子乃み汁あて本ミ

かん乃君もむこよてみまほしくたげまきり 伊勢物語ニゴカ子ト有也  
わくさのこもこハ 男共 傍人日遊仙窟

うちあまし給へふ白くあど弱常あまど 白香ナド也  
余はまてはもさうとやあまむらんとあまに白くあまの初也

モキハ枯木也枝ナドハ益キ横ナル木ヲ云也杭ハ廣韻云樹每枝也  
野交哥合判詞云 順 子クサニ白花ノアタリニモキノマウニテニリ

ニク侍トイヘリ

いづく神の心てみたもへうあどいひとさよふまのいとせうりしとく  
ちぐ 色ヨリモ香コソアハレトヲモホユレ  
タカワテフレシ宿ノ梅ソモ  
いづく心也 心也

いとくあまたふあうあも 苦 心ニキ心歌  
せんかう乃行しき 浅香一折あや

あでくいがへふ 感シカヘルナリ  
梅がえをうあまき 梅枝 催馬示呂

あづまをいしうかきあまをり 女のことあてア品よりうたはかり  
いしをいしぬとていしおのひて 本ノニ

うぐいしをいしぬとていしおのひて 本ノニ  
草色梅笛坐水邊 詠詠 花ノ香ヲ凡ノタヨリニタクヘテソ  
鶯サソフニルヘニハマル

ささくさうたふ 此殿呂  
ことぶきとだよとむや 言次 同

たき河をわがど 勢よいごあてうたふ 竹川 呂 竹川ノ



橋ソツメナルヤ花ソノニ我ヲハハナテメサシクハヘテ同シ聲ト云ハ未  
練ノ人ナレハ兩人シテ同音ニイタスト云心也

ぬいともみては志のぶふこもほしゅうれど  
酒顯本心ト云支歎 伊行尺 ヲモフニニフルコトソニケニケル  
色ニハイトシト思ヒシモノヲ

あまぞもがなとけうごまきて  
わうちいともくろくろくどいたく 是モ苦歎但ウラミタル心也物エニ  
シナトノ心歎

きけがらろくろくサ出しいとつふ 紅葉ハナカハ、時ハ竹川ノ  
淵ノミトリモ色カハラン  
大和国宇陀郡有竹川流之由見 重記  
みづじまををあんごめきこめめりし 水驛此物語男踏哥

取ヨリ云ハシメタリ 益饗應之也 是ハ俗ニスエキツルト云一歎  
心ハ同シ事也

ゆく様のあればかりうひらきり サクラサクサク 桜ノ山ノサクラ花  
咲サクラアハチルサクラアリ 大つたのさうりあらう  
やあまのいよのやうまたをくさみね サクラ花チリカヒクモレ老ラクノ  
コトイフナル道ニカフカニ  
本ノ一、 九八

ゆはの君ぞんぞん 給とて 見助

け様乃れいふ少うりにまうふつきてもとふふかふまひを思  
給いつれい 童稚悉成入園林半喬木 白氏文集

身ノ憂ヲカタリイテハ トメカタカハヘシトナリ 難留

あらし色乃あやめをそれとみわらふ 桜色ニ衣ハフカクソメテキン  
花ノチリナニ後ノカタミニ ぎふちりあんほのかたみ  
あまともみまかし

右わたせ給ひぬこまれらう 高廉乱声 高廉ハ右ノ物ナレハ也  
色あり

あらしゆへ風よ心を 人ハカル心ノクニハキタナクテキヨキ渚ライカテスキケニ思クニナキ文字  
此哥ノ心歎

心けりて池の汀ふねつふ花淡と 枝ヨリモアタニチリニ花ナレハ  
ヲチテモ水ノアハトコソナレ 加てもわがたふれ

あれま 馴也



横む白ひあまたよわらさむとねほりやがかりに神はあつとやい

大空ニヲホフハカリノ袖モ哉  
春咲花ヲ風ニニカセシ

云下ナリ

人ノ親ノ心ハマニニアラ子氏  
子ヲ思フ道ニトヒヌル哉

奪取

ウレトノミヒトヘニ物ハヲモホヘテ  
た右ニモヌルハソテカナ

御前ニテ取申心致

本ノミ

伊勢物語  
真名本

向燒 日本記

つさきもあられとつらものこをまことありなれと

かひゆづれれんぎんぐうらりけむ 顯證アラハ也 見證アラハ也

むりひ火つらもこバ

人ノハラタチヌヘキコライハレヌサキニナタヨリ又ハラタチカヘス心致  
めあつれてわらわぐもせとてまうらうらバ メクハシハヲレフル心也  
わりやつよまふらんからまけと心ひとつよいりぐまうらとれ

園碁ノ好手ノ強弱ニ依テアルヘキ勝劣ナレバメクハシセニヨルヘカラス  
トヨメル也

九九

と表として多をゆふせういさ死を君もまかるとる我もあつと

碁ニイキシト云フアレハワカ身ヲヨソヘテ云也

九日少将すいりね 鬚黒大臣木君奏冷泉院四月九日太上天

皇納妃例寛平法皇以京極御息取時平女時平女為妃

雑役

さうやくのうとて

哀シナハタカ名ハタニ世中ノ  
ツ子ナキ物トイヒハナストモ

つが乃うへふもかけ給べき清らるるかど 思給へまかばひたみちも

いそがれゆまうとあどらうふ 史記曰季札之初使北过徐君々々

々好季札劔口弗敢言季札心知之為使上国未献還至徐々君已死

於是乃解其宝劔繫之徐君塚樹而去徙者曰徐君已死尚誰予乎

季札曰不然始吾心已許之豈以死倍吾心哉吳世家漢主手中

吹不駐徐君塚上仰犹懸 朗詠

まうらふあわねど

素帆

其年かりておとこだうかせられり

男踏奇 正月十四日



此四位の侍後右乃かとうあり 右哥以前勅畢

もきし志をのりふかりしつらびも思ひしして 与藤侍後竹  
川謡ニ一也

さむし〜くを清くらむさみふ志後つ 万春樂 踏哥曲 勘  
初音巻畢

かつ〜れつむふゆるふいり〜むやあり久し〜のよち〜いありと  
み〜ざりきかど後後へい

やみいあやあきと  
このとれさど〜つらびもふ  
いかりやどにまわりたまひぬ  
かくいひく〜てのり〜ていりあらん  
久後城よ々後昔のれいあどいさ出て〜乃こと〜つらひ後ぬ

以尚待讓子例  
みちのりて成ひたち常乃と〜多習あこと〜さ〜に〜するい

東路ノ道ノハテ成ヒタチ常ノ  
カコトハカリモアハントソ思フ

た大后失給て右はたよ藤大納言た大將け給へる大后よ  
加給次々の人〜ありつらびりてけかけら中將ハ中納言よ之位  
乃君ハ宰相よめてよあ〜い〜後へぬ

國史云右大臣藤原朝臣三守阿波守後五位上真作ノ弟  
五子也三守早入大孝受習五経歴文章生入任大臣并大將  
菅家 貞觀四年五月十七日補文章生九月日得業生十

一年三月對策及第十八年四月一日侍從自余中裏書一  
キヤウタイ、儒筆名也寛平五年二月十六日任参議元式部  
權太補後四位下五年夕霧大臣任侍從同七年任中納言叙位

三位九年六月十九日任權太納言兼右近衛大將  
昌泰三年二月十四日任右大臣 大將如元五十六

藤原道明 号山井大將 寛平二年補文章生延喜十三年  
正月廿八日任中納言四月十五日兼右近衛大將

藤原在衡 粟田九大臣 延喜十三年五月日補文章生十  
六年十二月九日得業生對策及第中失畧之安和六年三月







世二終



